

# 日本聖公会聖歌研究書誌及び解題、聖歌論

手代木俊一

「日本聖公会聖歌研究書誌及び解題、聖歌論」（以下、「書誌」）は、明治期から2008年12月末までの日本聖公会聖歌に対する論考（単行書・論文）、記事等を書誌としてまとめ、その内容を大まかに分類し、必要な場合には解題を付したものである。なおカールスの聖歌論「日本語讃美歌のための音楽」（原文英語）は、日本聖公会系の聖歌論として最初の論考というばかりでなく、日本語で歌うことを前提とした最初の聖歌・讃美歌論なので詳述した。

最初に日本聖公会聖歌に対する研究を年代順、人名順に通覧してみたい。<sup>1)</sup>

## 年 代 順

1882（明治15）年

- \* 「Music for Japanese Hymns」Carles, 『Chrysanthemum』 Vol.2, No.10（10月）[「カールス 著、手代木俊一訳『日本語讃美歌のための音楽』（翻訳）』『フェリス女学院大学音楽学部紀要』第3号（1998年3月）、『讃美歌・聖歌と日本の近代』（音楽之友社 1999年11月）に改訂・収録]

1913（大正2）年

- \* 『聖歌物語』織笠繁蔵著（一星社 11月）

1926（昭和元）年

- \* 『祈祷書と古今聖歌集の宗教』稲垣陽一郎著（日本聖公会出版社 4月）

1933（昭和8）年

- \* 「日本聖公会音楽史序説」落合吉二著、『教会文化』第1巻2号（日本聖公会全国青年聯盟出版部 12月）

1936（昭和11）年

- \* 『聖公会音楽委員会第1回報告』カール・ブランスタッド著（聖公会音楽委員会 10月）

1947（昭和22）年

- \* 『聖歌の話』八代斌助著（明和書院 6月）[大正9年版『古今聖歌集』収録讃美歌を対象とする]

1963（昭和38）年

- \* 「古今聖歌集第5部『チャント』について」松岡安立著、『さんび』第6号（枚方市 讃美歌学会 2月）

1965（昭和40）年

- \* 「手写本『早晚禱文・利多仁伊』について」矢崎健一著、『立教大学研究報告 人文科学』No.18（立教大学一般教育部編集委員会 9月）

1966（昭和41）年

- \* 『聖歌の話』八代斌助著（日本聖公会出版部 12月）[昭和34年改訂増補版『古今聖歌集』収録聖歌を対象とする。以下特に注記がない場合はこの版]

1982（昭和57）年

- \* 『アンティフォン』第1～53号、横浜教区礼拝音楽委員会編（横浜教区礼拝音楽委員会 4月刊、53号 [1998年11月]）

1984（昭和59）年

- \* 「『よいわれて』《Rock of Age》考」今井丞治著、『礼拝研究』第3号（礼拝研究会 12月）

1986（昭和61）年

- \* 『聖歌の友 古今聖歌集作詞者略解』佐藤裕著（聖公会出版 1月）
- \* 「日本聖公会のアグリカン・チャント」猿田長春著、『特集 礼拝における詩篇（礼拝と音楽 [季刊]）』第48号、1986 / Winter（日本基督教団出版局 2月）
- \* 「ここがポイント！ 聖歌伴奏」第106、39、23、108、348、6、27、130、137、沢邦介著、『アンティフォン』第11～19号（横浜教区礼拝音楽委員会 3、6、10月、1987年3、6、9、11月、1988年3、5月）
- \* 「『聖歌の友』から」高木（上田）亜樹子著、『アンティフォン』第11号（横浜教区礼拝音楽委員会 3月）

1987（昭和62）年

- \* 「聖公会の典礼の流れと聖歌」佐藤裕著、『特集 讃美歌（礼拝と音楽 [季刊]）』第52号、1987 / Winter（日本基督教団出版局 2月）
- \* 『聖歌のしらべ 古今聖歌集作曲者略解』佐藤裕著（聖公会出版 12月）

1988（昭和63）年

- \* 「現行聖歌集に入れられた翻訳と作詞について」1～9、松平惟太郎著、『アンティフォン』第18～25、28号（横浜教区礼拝音楽委員会 3、5、9、11月、1989年3、6、11月、1990年1、9月）

- \* 「日本聖公会聖歌の歴史」 1、塩谷栄二著、『礼拝研究』第6（礼拝研究会 3月）

1989（平成元・昭和64）年

- \* 「日本聖公会聖歌の歴史」 2、塩谷栄二著、『礼拝研究』7（礼拝研究会 3月）

1990（平成2）年

- \* 『賛美の花たば』青木瑞恵著、河村員子画・編（一粒社 10月）
- \* 「主日の聖歌」 1～12、相沢牧人著、『アンティフォン』第28～32、34～40号（横浜教区礼拝音楽委員会 1990年9、11月、1991年3、6、9月、1992年3、6、9、11月、1993年3、6、10月）
- \* 「聖歌こぼれ話」古今聖歌集184、185、184、青木瑞恵著、『アンティフォン』第29～31号（横浜教区礼拝音楽委員会 1990年11月、1991年3、6月）

1992（平成4）年

- \* 「聖歌の作曲・編曲に関して」 1～4、長沢滝子著、『アンティフォン』第34、37～39号（横浜教区礼拝音楽委員会 1992年3、11月、1993年3、6月）
- \* 「現行（新）祈祷書から見る『古今聖歌集』」 1～2、森紀旦著、『アンティフォン』第40～41号（横浜教区礼拝音楽委員会 1993年10月～1994年4月）

1993（平成5）年

- \* 「公聴会その後」 1～2、古今聖歌集増補版出版委員会、『アンティフォン』第39、41号（横浜教区礼拝音楽委員会 1993年6月、1994年4月）

1994（平成6）年

- \* 「公聴会その後」 3、鈴木隆太著、『アンティフォン』第42号（横浜教区礼拝音楽委員会 8月）
- \* 「今、私たちの賛美とは 各教派の賛美の現状と展望 日本聖公会」浜屋憲夫著、『特集新しい時代の賛美歌（礼拝と音楽 [季刊]）』第83号、1994 / Autumn（日本基督教団出版局 11月）
- \* 「古今聖歌集増補版出版委員会の働き」千村泰子著（古今聖歌集増補版出版委員長）、『アンティフォン』第43号（横浜教区礼拝音楽委員会 11月）

1995（平成7）年

- \* 「古今聖歌集を使いこなす」 1～3、相沢牧人著、『アンティフォン』第44～46号（横浜教区礼拝音楽委員会 2、6、7月）
- \* 「いよいよ古今聖歌集増補版が出版されます」梶原史朗著、『アンティフォン』第46号（横浜教区礼拝音楽委員会 7月）
- \* 「現行祈祷書と古今聖歌集増補版」加藤博道著、『アンティフォン』第47号（横浜教区礼拝音楽委員会 12月）
- \* 「増補版、『新しい聖歌を！』キャンペーン、そして…」鈴木隆太著、『アンティフォン』第47号

(横浜教区礼拝音楽委員会 12月)

- \* 「増補版出版までの経過と理念」千村泰子著、『アンティフォン』第47号(横浜教区礼拝音楽委員会 12月)
- \* 「聖歌集増補版を学ぶ」根谷崎武彦著、『アンティフォン』第47号(横浜教区礼拝音楽委員会 12月)

1996(平成8)年

- \* 「『古今聖歌集増補版 95』をめぐって」1～2、加藤博道著、『アンティフォン』第48～49号(横浜教区礼拝音楽委員会 4、8月)
- \* 「明治初期の聖公会聖歌における史実確認」塩谷栄二著、『歴史研究』第7号(日本聖公会歴史研究会 11月)

1997(平成9)年

- \* 「日本聖公会：聖歌集の歴史と謎(日本聖公会第9回歴史研究者の集い)」塩谷栄二著、(日光金谷ホテル 5月13日)配付資料
- \* 「新しい聖歌を！キャンペーン 各教区の取組み」教区礼拝音楽担当者会、『アンティフォン』第51号(横浜教区礼拝音楽委員会 9月)
- \* 「現行聖歌集評価チャート」聖歌集改訂委員会作成、『アンティフォン』第51号(横浜教区礼拝音楽委員会 9月)
- \* 「聖歌集改訂委員会報告」古本純一郎著、『アンティフォン』第51号(横浜教区礼拝音楽委員会 9月)

1998(平成10)年

- \* 「聖公会：聖歌集『たたへのうた』について」塩谷栄二著、『歴史研究』第8号(日本聖公会歴史研究会 3月)
- \* 「古今聖歌集 第45番に寄せて」堀越善晴著、『アンティフォン』第53号(横浜教区礼拝音楽委員会 11月)

1999(平成11)年

- \* 『聖歌集改訂ニュース』創刊号、聖歌集改訂委員会編[委員長 主教・古本純一郎(神戸教区)、書記 鈴木隆太(横浜教区)、広報 司祭・竹内謙太郎(東京教区)、司祭・松岡虔一(大阪教区)、主教・森紀旦(中部教区)、司祭・松本正俊(京都教区)、青木瑞恵[横浜教区]、加藤啓子(東京教区)、以下の号省略](聖歌集改訂委員会 1月)
- \* 『聖歌集改訂ニュース』第2号、聖歌集改訂委員会編(聖歌集改訂委員会 3月)
- \* 「大正時代から戦後復興までの聖公会聖歌史について(日本聖公会第10回歴史研究者の集い)」塩谷栄二著(会津若松：瀧の舞 5月18日)配付資料
- \* 『聖歌集改訂ニュース』第3号、聖歌集改訂委員会編(聖歌集改訂委員会 8月)

2000（平成12）年

- \*『聖歌集改訂ニュース』第4号、聖歌集改訂委員会編（聖歌集改訂委員会 4月）
- \*『聖歌集改訂ニュース』第5号、聖歌集改訂委員会編（聖歌集改訂委員会 8月）
- \*『聖歌集改訂ニュース』第6号、聖歌集改訂委員会編（聖歌集改訂委員会 12月）

2001（平成13）年

- \*『聖歌集改訂ニュース』第7号、聖歌集改訂委員会編（聖歌集改訂委員会 3月）
- \*「聖公会の礼拝音楽と聖歌をめぐって（北関東教区聖職養成神学塾 夏の特別公開講座）」塩谷米二著（浦和諸聖徒教会 8月13日）配付資料
- \*「日本聖公会の音楽関係文献集」『聖公会の礼拝音楽と聖歌をめぐって（北関東教区聖職養成神学塾 夏の特別公開講座）』塩谷米二著（浦和諸聖徒教会 8月13日）配付資料
- \*「聖歌集と松山高吉について」塩谷米二著、日本聖公会歴史研究会『歴史研究』第11号（日本聖公会歴史研究会 9月）

2002（平成14）年

- \*『心は賛美に満ちて [改訂古今聖歌集試用版] ガイドブック』日本聖公会聖歌集改訂委員会（日本聖公会聖歌集改訂委員会 5月）
- \*『聖歌集改訂ニュース』第8号、聖歌集改訂委員会編（聖歌集改訂委員会 12月）

2003（平成15）年

- \*『聖歌集改訂ニュース』第9号、聖歌集改訂委員会編（聖歌集改訂委員会 11月）

2004（平成16）年

- \*『聖歌集改訂ニュース』第10号、聖歌集改訂委員会編（聖歌集改訂委員会 11月）

2005（平成17）年

- \*「聖公会の礼拝における詩編 歌われてきた詩編、これから歌っていく詩編」加藤啓子著、『特集 詩編をうたう（礼拝と音楽 [季刊]）』第124号、2005 / Winter（日本基督教団出版局 2月）
- \*「日本聖公会聖歌書誌」手代木俊一著、『立教学院史研究』第3号（立教大学立教学院史資料センター 3月）
- \*『ありがとう ブランスタッド先生 立教を学生を、そして音楽を愛した生涯』『ありがとう ブランスタッド先生』編集委員会編（『ありがとう ブランスタッド先生』編集委員会 11月）
- \*『聖歌集改訂ニュース』第11号、聖歌集改訂委員会編（聖歌集改訂委員会 12月）

2006（平成18）年

- \*「多様性と一致・自由と秩序 揺れ動いた50年・聖公会の場合（礼拝と音楽の半世紀 変わるもの

と、変わらないもの)」加藤弘道著、『特集 礼拝と音楽、この半世紀（礼拝と音楽 [季刊]）』第128号、2006 / Winter（日本基督教団出版局 2月）

\* 「最近の聖歌・讃美歌の動向」塩谷栄二著、『日本聖公会史談会会報』創刊号（日本聖公会史談会 3月）

\* 「日本聖公会最初の聖歌 C. M. ウィリアムズ訳の聖歌とその後の聖公会聖歌集」手代木俊一著、『日本聖公会史談会会報』創刊号（日本聖公会史談会 3月）

\* 「日本聖公会最初の聖歌、C. M. ウィリアムズ訳の聖歌をめぐる」手代木俊一著、『立教学院史研究』第4号（立教大学立教学院史資料センター 3月）

\* 「聖公会の改訂聖歌集」鈴木隆太著、横坂康彦編『音楽（講座 日本のキリスト教芸術 1）』（日本キリスト教団出版局 4月）

\* 『礼拝 聖歌集の改訂から学ぶ（第十二期信徒神学校講座）』1～9、青木瑞恵著（日本聖公会横浜教区 4月）

\* 『聖歌の話』佐藤裕著（日本聖公会奈良キリスト教会 9月）

#### 2007（平成19）年

\* 「松山高吉の聖書と聖歌に対する功績」塩谷栄二著、『日本聖公会史談会会報』第2号（日本聖公会史談会 7月）

\* 「日本語聖歌（讃美歌）の源流、C. M. ウィリアムズ訳聖歌」手代木俊一著、『季刊 立教』第203号Winter 2007（立教大学 12月）

#### 2008（平成20）年

\* 「聖公会系（第2章プロテスタント系その2、II）」『日本プロテスタント讃美歌・聖歌史事典 明治篇』手代木俊一著（港の人 3月）

\* 「松山高吉について（論考）」塩谷栄二著、『歴史研究』第17号（日本聖公会歴史研究会 4月）

\* 「今・これから、私たちの賛美の歌 『日本聖公会 聖歌集』について」宮崎光著、『日本讃美歌学会紀要』第3号（日本讃美歌学会 9月）

\* 『聖公会の聖歌 いのちを奏でよ』宮崎光著（聖公会出版 12月）

\* 『道はつづく』青木瑞恵著（聖公会出版 12月）

## 人名順（五十音順）

- 1) 相沢牧人著「主日の聖歌」1～12『アンティフォン』第28～32、34～40（横浜教区礼拝音楽委員会 1990年9、11月、1991年3、6、9月、1992年3、6、9、11月、1993年3、6、10月）
- 2) 相沢牧人著「古今聖歌集を使いこなす」1～3『アンティフォン』第44～46号（横浜教区礼拝音楽委員会 1995年2、6、7月）
- 3) 青木瑞恵著、河村員子画・編『賛美の花たば』（一粒社 1990年10月）
- 4) 青木瑞恵著「聖歌こぼれ話」古今聖歌集184、185、184『アンティフォン』第29～31号（横浜教区礼拝音楽委員会 1990年11月、1991年3、6月）
- 5) 青木瑞恵（聖歌集改訂委員会広報）『聖歌集改訂ニュース』創刊号～第11号（1999年1月～2005年12月）
- 6) 青木瑞恵著『礼拝 聖歌集の改訂から学ぶ（第十二期信徒神学校講座）』1～9（日本聖公会横浜教区 2006年4月）
- 7) 青木瑞恵著『道はつづく』（聖公会出版 2008年12月）
- 8) 『ありがとう ブランスタッド先生』編集委員会編『ありがとう ブランスタッド先生立教を学生を、そして音楽を愛した生涯』（『ありがとう ブランスタッド先生』編集委員会 2005年11月）
- 9) 稲垣陽一郎著『祈祷書と古今聖歌集の宗教』（日本聖公会出版社 1926年4月）
- 10) 今井丞治著「『よいわれて』《Rock of Age》考」『礼拝研究』第3号（礼拝研究会 1984年12月）
- 11) 落合吉二著「日本聖公会音楽史序説」『教会文化』第1巻2号（日本聖公会全国青年聯盟出版部 1933年12月）
- 12) 織笠繁蔵著『聖歌物語』（一星社 1913年11月）
- 13) 梶原史朗著「いよいよ古今聖歌集増補版が出版されます」『アンティフォン』第46号（横浜教区礼拝音楽委員会 1995年7月）
- 14) 加藤啓子（聖歌集改訂委員会広報）『聖歌集改訂ニュース』創刊号～第11号（聖歌集改訂委員会 1999年1月～2005年12月）
- 15) 加藤啓子著「聖公会の礼拝における詩編 歌われてきた詩編、これから歌っていく詩編」『特集 詩編をうたう（礼拝と音楽 [季刊]）』第124号、2005 / Winter（日本基督教団出版局 2005年2月）
- 16) 加藤博道著「現行祈祷書と古今聖歌集増補版」『アンティフォン』第47号（横浜教区礼拝音楽委員会 1995年12月）
- 17) 加藤博道著『『古今聖歌集増補版 95』をめぐって』1～2『アンティフォン』第48～49号（横浜教区礼拝音楽委員会 1996年4、8月）
- 18) 加藤博道著「多様性と一致・自由と秩序 揺れ動いた50年・聖公会の場合（礼拝と音楽の半世紀 変わるものと、変わらないもの）」『特集 礼拝と音楽、この半世紀（礼拝と音楽 [季刊]）』第128号、2006 / Winter（日本基督教団出版局 2006年2月）
- 19) Carles, 「Music for Japanese Hymns」『Chrysanthemum』Vo.2, No.10（1882年10月）[「カールス著、手代木俊一訳『日本語讃美歌のための音楽』（翻訳）』『フェリス女学院大学音楽学部紀要』

- 第3号(1998年3月)、『讃美歌・聖歌と日本の近代』(音楽之友社 1999年11月)に改訂・収録]
- 20) 教区礼拝音楽担当者会「新しい聖歌を! キャンペーン 各教区の取組み」『アンティフォン』第51号(横浜教区礼拝音楽委員会 1997年9月)
- 21) 古今聖歌集増補版出版委員会「公聴会その後」1~3『アンティフォン』第39、41~42号(横浜教区礼拝音楽委員会 1993年6月、1994年4、8月)
- 22) 佐藤裕著『聖歌の友 古今聖歌集作詞者略解』(聖公会出版 1986年1月)
- 23) 佐藤裕著「聖公会の典礼の流れと聖歌」『特集 讃美歌(礼拝と音楽[季刊])』第52号、1987/Winter(日本基督教団出版局 1987年2月)
- 24) 佐藤裕著『聖歌のしらべ 古今聖歌集作曲者略解』(聖公会出版 1987年12月)
- 25) 佐藤裕著『聖歌の話』(日本聖公会奈良キリスト教会 2006年9月)
- 26) 猿田長春著「日本聖公会のアグリカン・チャント」『特集 礼拝における詩篇(礼拝と音楽[季刊])』第48号、1986/Winter(日本基督教団出版局 1986年2月)
- 27) 沢邦介著「ここがポイント! 聖歌伴奏」第106、39、23、108、348、6、27、130、137『アンティフォン』第11~19号(横浜教区礼拝音楽委員会 1986年3、6、10月、1987年3、6、9、11月、1988年3、5月)
- 28) 塩谷栄二著「日本聖公会聖歌の歴史」1-2『礼拝研究』第6-7(礼拝研究会 1988年3月、1989年3月)
- 29) 塩谷栄二著「明治初期の聖公会聖歌における史実確認」『歴史研究』第7号(日本聖公会歴史研究会 1996年11月)
- 30) 塩谷栄二著「日本聖公会: 聖歌集の歴史と謎(日本聖公会第9回歴史研究者の集い)」(日光金谷ホテル 1997年5月13日) 配付資料
- 31) 塩谷栄二著「聖公会: 聖歌集『たたへのうた』について」『歴史研究』第8号(日本聖公会歴史研究会 1998年3月)
- 32) 塩谷栄二著「大正時代から戦後復興までの聖公会聖歌史について(日本聖公会第10回歴史研究者の集い)」(会津若松: 瀧の舞 1999年5月18日) 配付資料
- 33) 塩谷栄二著「聖公会の礼拝音楽と聖歌をめぐって(北関東教区聖職養成神学塾 夏の特別公開講座)」(浦和諸聖徒教会 2001年8月13日) 配付資料
- 34) 塩谷栄二著「日本聖公会の音楽関係文献集」『聖公会の礼拝音楽と聖歌をめぐって(北関東教区聖職養成神学塾 夏の特別公開講座)」(浦和諸聖徒教会 2001年8月13日) 配付資料
- 35) 塩谷栄二著「聖歌集と松山高吉について」日本聖公会歴史研究会『歴史研究』第11号(日本聖公会歴史研究会 2001年9月)
- 36) 塩谷栄二著「聖公会古今聖歌集の功労者、松田承久について」日本聖公会歴史研究会『歴史研究』第14号(日本聖公会歴史研究会 2005年6月)
- 37) 塩谷栄二著「最近の聖歌・讃美歌の動向」『日本聖公会史談会会報』創刊号(日本聖公会史談会 2006年3月)
- 38) 塩谷栄二著「松山高吉の聖書と聖歌に対する功績」『日本聖公会史談会会報』第2号(日本聖公会史談会 2007年7月)



- 39) 塩谷栄二著「松山高吉について（論考）」『歴史研究』第17号（日本聖公会歴史研究会 2008年4月）
- 40) 鈴木隆太著「公聴会その後」3『アンティフォン』第42号（横浜教区礼拝音楽委員会 1994年8月）
- 41) 鈴木隆太著「増補版、『新しい聖歌を!』キャンペーン、そして…」『アンティフォン』第47号（横浜教区礼拝音楽委員会 1995年12月）
- 42) 鈴木隆太（聖歌集改訂委員会書記）『聖歌集改訂ニュース』創刊号～第11号（1999年1月～2005年12月）
- 43) 鈴木隆太著「聖公会の改訂聖歌集」横坂康彦編『音楽（講座 日本のキリスト教芸術 1）』（日本キリスト教団出版局 2006年4月）
- 44) 聖歌集改訂委員会作成「現行聖歌集評価チャート」『アンティフォン』第51号（横浜教区礼拝音楽委員会 1997年9月）
- 45) 聖歌集改訂委員会編『聖歌集改訂ニュース』創刊号～第11号（聖歌集改訂委員会 1999年1月～2005年12月）〔聖歌集改訂委員会編、委員長 主教・古本純一郎（神戸教区）、書記 鈴木隆太（横浜教区）、広報 司祭・竹内謙太郎（東京教区）、司祭・松岡度一（大阪教区）、主教・森紀旦（中部教区）、司祭・松本正俊（京都教区）、青木瑞恵〔横浜教区〕、加藤啓子（東京教区）〕
- 46) 高木（上田）亜樹子著『『聖歌の友』から』『アンティフォン』第11号（横浜教区礼拝音楽委員会 1986年3月）
- 47) 竹内謙太郎（聖歌集改訂委員会広報）『聖歌集改訂ニュース』創刊号～第11号（1999年1月～2005年12月）
- 48) 千村泰子（古今聖歌集増補版出版委員長）著「古今聖歌集増補版出版委員会の働き」『アンティフォン』第43号（横浜教区礼拝音楽委員会 1994年11月）
- 49) 千村泰子著「増補版出版までの経過と理念」『アンティフォン』第47号（横浜教区礼拝音楽委員会 1995年12月）
- 50) 手代木俊一著「日本聖公会聖歌書誌」『立教学院史研究』第3号（立教大学立教学院史資料センター 2005年3月）
- 51) 手代木俊一著「日本聖公会最初の聖歌 C. M. ウィリアムズ訳の聖歌とその後の聖公会聖歌集」『日本聖公会史談会会報』創刊号（日本聖公会史談会 2006年3月）
- 52) 手代木俊一著「日本聖公会最初の聖歌、C. M. ウィリアムズ訳の聖歌をめぐって」『立教学院史研究』第4号（立教大学立教学院史資料センター 2006年3月）
- 53) 手代木俊一著「日本語聖歌（讃美歌）の源流、C. M. ウィリアムズ訳聖歌」『季刊 立教』第203号Winter 2007（立教大学 2007年12月）
- 54) 手代木俊一著「聖公会系（第2章プロテスタント系その2、II）」『日本プロテスタント讃美歌・聖歌史事典 明治篇』（港の人 2008年3月）
- 55) 長沢滝子著「聖歌の作曲・編曲に關係して」1～4『アンティフォン』第34、37～39号（横浜教区礼拝音楽委員会 1992年3、11月、1993年3、6月）
- 56) 日本聖公会聖歌集改訂委員会『心は賛美に満ちて [改訂古今聖歌集試用版] ガイドブック』（日本聖公会聖歌集改訂委員会 2002年5月）
- 57) 根谷崎武彦著「聖歌集増補版を学ぶ」『アンティフォン』第47号（横浜教区礼拝音楽委員会 1995

- 年12月)
- 58) 浜屋憲夫著「今、私たちの賛美とは 各教派の賛美の現状と展望 日本聖公会」『特集 新しい時代の賛美歌 (礼拝と音楽 [季刊])』第83号、1994 / Autumn (日本基督教団出版局 1994年11月)
  - 59) ブランスタッド、カール著『聖公会音楽委員会第1回報告』(聖公会音楽委員会 1936年10月)
  - 60) 古本純一郎著「聖歌集改訂委員会報告」『アンティフォン』第51号 (横浜教区礼拝音楽委員会 1997年9月)
  - 61) 古本純一郎 (聖歌集改訂委員会委員長)『聖歌集改訂ニュース』創刊号～第11号 (聖公会音楽委員会 1999年1月～2005年12月)
  - 62) 堀越善晴著「古今聖歌集 第45番に寄せて」『アンティフォン』第53号 (横浜教区礼拝音楽委員会 1998年11月)
  - 63) 松岡虔一 (聖歌集改訂委員会広報)『聖歌集改訂ニュース』創刊号～第11号 (聖歌集改訂委員会1999年1月～2005年12月)
  - 64) 松岡安立著「古今聖歌集第5部『チャント』について」『さんび』第6号 (枚方市 讃美歌学会 1963年2月)
  - 65) 松平惟太郎著「現行聖歌集に入れられた翻訳と作詞について」1～9『アンティフォン』第18～25、28号 (横浜教区礼拝音楽委員会 1988年3、5、9、11月、1989年3、6、11月、1990年1、9月)
  - 66) 松本正俊 (聖歌集改訂委員会広報)『聖歌集改訂ニュース』創刊号～第11号 (聖歌集改訂委員会 1999年1月～2005年12月)
  - 67) 宮崎光著「今・これから、私たちの賛美の歌 『日本聖公会 聖歌集』について」『日本讃美歌学会紀要』第3号 (日本讃美歌学会 2008年9月)
  - 68) 宮崎光著『聖公会の聖歌 いのちを奏でよ』(聖公会出版 2008年12月)
  - 69) 森紀旦著「現行 (新) 祈祷書から見る『古今聖歌集』」1～2『アンティフォン』第40～41号 (横浜教区礼拝音楽委員会 1993年10月～1994年4月)
  - 70) 森紀旦 (聖歌集改訂委員会広報)『聖歌集改訂ニュース』創刊号～第11号 (聖歌集改訂委員会 1999年1月～2005年12月)
  - 71) 矢崎健一著「手写本『早晚禱文・利多仁伊』について」『立教大学研究報告 人文科学』No.18 (立教大学一般教育部編集委員会 1965年9月)
  - 72) 八代斌助著『聖歌の話』(明和書院 1947年6月) [大正11年版『古今聖歌集』収録讃聖歌を対象]
  - 73) 八代斌助著『聖歌の話』(日本聖公会出版部 1966年12月)
  - 74) 横浜教区礼拝音楽委員会編『アンティフォン』第1～53号 (横浜教区礼拝音楽委員会 1982年4月～1998年11月)

これらの論考・記事は、A) 歴史、B) 略解、C) 書誌、D) 作詞家・作曲家研究、E) 個別聖歌（ジャンル）・聖歌集研究、F) 作詞・作曲・編曲・伴奏、G) 改訂、H) 礼拝との関連、I) 研修会・研究会との関連、J) エッセイ・感想、K) 書評、L) 定期刊行物、M) 聖歌論に大別される。上記論考・記事をこの分類のあてはめ、タイトルから内容を判断し難い論考・記事には簡単な解題を付して位置づけを明らかにし、M) 聖歌論、カールスの「日本語讃美歌のための音楽」に関しては詳述したい。なお筆頭の番号は人名順（五十音順）の番号で出版事項を省略した。

#### A) 歴史（歴史資料）

- 11) 落合吉二著「日本聖公会音楽史序説」『教会文化』第1巻2号。
- 15) 加藤啓子著「聖公会の礼拝における詩編 歌われてきた詩編、これから歌っていく詩編」『特集 詩編をうたう（礼拝と音楽 [季刊]）』第124号、2005/Winter。
- 18) 加藤博道著「多様性と一致・自由と秩序 揺れ動いた50年・聖公会の場合（礼拝と音楽の半世紀 変わるものと、変わらないもの）」『特集 礼拝と音楽、この半世紀（礼拝と音楽 [季刊]）』第128号、2006 / Winter。
- 22) 佐藤裕著『聖歌の友 古今聖歌集作詞者略解』。
- 23) 佐藤裕著「聖公会の典礼の流れと聖歌」『特集 讃美歌（礼拝と音楽 [季刊]）』第52号、1987 / Winter（1987年2月）。
- 24) 佐藤裕著『聖歌のしらべ 古今聖歌集作曲者略解』。
- 25) 佐藤裕著『聖歌の話』。
- 26) 猿田長春著「日本聖公会のアグリカン・チャント」『特集 礼拝における詩篇（礼拝と音楽 [季刊]）』第48号、1986 / Winter。
- 28) 塩谷栄二著「日本聖公会聖歌の歴史」1－2『礼拝研究』第6－7。
- 29) 塩谷栄二著「明治初期の聖公会聖歌における史実確認」『歴史研究』第7号。
- 30) 塩谷栄二著「日本聖公会：聖歌集の歴史と謎（日本聖公会第9回歴史研究者の集い）」。
- 32) 塩谷栄二著「大正時代から戦後復興までの聖公会聖歌史について（日本聖公会第10回歴史研究者の集い）」。
- 33) 塩谷栄二著「聖公会の礼拝音楽と聖歌をめぐる（北関東教区聖職養成神学塾 夏の特別公開講座）」。
- 37) 塩谷栄二著「最近の聖歌・讃美歌の動向」『日本聖公会史談会会報』創刊号。
- 54) 手代木俊一著「聖公会系（第2章プロテスタント系その2、II）」『日本プロテスタント讃美歌・聖歌史事典 明治篇』。
- 59) ブランスタッド、カール著『聖公会音楽委員会第1回報告』。
- 68) 宮崎光著『聖公会の聖歌 いのちを奏でよ』。

#### B) 略解（注記にないものは、昭和34年改訂増補版『古今聖歌集』とその改定版を対象）

- 3) 青木瑞恵著、河村員子画・編『賛美の花たば』。
- 4) 青木瑞恵著「聖歌こぼれ話」古今聖歌集184、185、184『アンティフォン』第29～31号。

- 6) 青木瑞恵著『礼拝 聖歌集の改訂から学ぶ（第十二期信徒神学校講座）』1～9。
- 7) 青木瑞恵著『道はつづく』。上記『礼拝 聖歌集の改訂から学ぶ』が収録されている。
- 12) 織笠繁蔵著『聖歌物語』（一星社 1913年11日）。明治35年版『古今聖歌集』収録聖歌を対象とする。
- 22) 佐藤裕著『聖歌の友 古今聖歌集作詞者略解』。
- 23) 佐藤裕著「聖公会の典礼の流れと聖歌」『特集 讃美歌（礼拝と音楽 [季刊]）』第52号、1987 / Winter（1987年2月）。
- 24) 佐藤裕著『聖歌のしらべ 古今聖歌集作曲者略解』。
- 25) 佐藤裕著『聖歌の話』。
- 56) 日本聖公会聖歌集改訂委員会『心は賛美に満ちて [改訂古今聖歌集試用版] ガイドブック』。
- 72) 八代斌助著『聖歌の話』。大正11年版『古今聖歌集』収録聖歌を対象とする。
- 73) 八代斌助著『聖歌の話』。

### C) 書誌

- 34) 塩谷栄二著「日本聖公会の音楽関係文献集」『聖公会の礼拝音楽と聖歌をめぐって（北関東教区聖職養成神学塾 夏の特別公開講座）』。
- 50) 手代木俊一著「日本聖公会聖歌書誌」『立教学院史研究』第3号。
- 54) 手代木俊一著「聖公会系（第2章プロテスタント系その2、II）」『日本プロテスタント讃美歌・聖歌史事典 明治篇』。

### D) 作詞家・作曲家研究（個別作品研究）

- 8) 『ありがとう ブランスタッド先生』編集委員会編『ありがとう ブランスタッド先生 立教を学生を、そして音楽を愛した生涯』。
- 10) 今井丕治著「《よよいわわれて》《Rock of Age》考」『礼拝研究』第3号。C. M. ウィリアムズ訳《よよいわわれて》についての考察。
- 35) 塩谷栄二著「聖歌集と松山高吉について」日本聖公会歴史研究会『歴史研究』第11号。
- 36) 塩谷栄二著「聖公会古今聖歌集の功労者、松田承久について」日本聖公会歴史研究会『歴史研究』第14号。
- 38) 塩谷栄二著「松山高吉の聖書と聖歌に対する功績」『日本聖公会史談会会報』第2号。
- 39) 塩谷栄二著「松山高吉について（論考）」『歴史研究』第17号。
- 51) 手代木俊一著「日本聖公会最初の聖歌 C. M. ウィリアムズ訳の聖歌とその後の聖公会聖歌集」『日本聖公会史談会会報』創刊号。
- 52) 手代木俊一著「日本聖公会最初の聖歌、C. M. ウィリアムズ訳の聖歌をめぐって」『立教学院史研究』第4号。
- 53) 手代木俊一著「日本語聖歌（讃美歌）の源流、C. M. ウィリアムズ訳聖歌」『季刊 立教』第203号Winter 2007。
- 71) 矢崎健一著「手写本『早晚禱文・利多仁伊について』」『立教大学研究報告 人文科学』No.18。C. M. ウィリアムズ訳聖歌4篇についての考察。

#### E) 聖歌集（聖歌集内のジャンルを含む）研究

- 11) 落合吉二著「日本聖公会音楽史序説」『教会文化』第1巻2号。刊行された聖歌集について解説されているが、所蔵先不明の1874（明治7）年『たゝえのうた』に触れていることが特筆され、実物を目にした人でなければ書けない記述が存在する。
- 13) 梶原史朗著「いよいよ古今聖歌集増補版が出版されます」『アンティフォン』第46号。
- 17) 加藤博道著『古今聖歌集増補版 95』をめぐって」1～2『アンティフォン』第48～49号。
- 20) 教区礼拝音楽担当者会「新しい聖歌を！キャンペーン 各教区の取組み」『アンティフォン』第51号。
- 21) 古今聖歌集増補版出版委員会「公聴会その後」1～3『アンティフォン』第39、41～42号
- 29) 塩谷栄二著「明治初期の聖公会聖歌における史実確認」『歴史研究』第7号。『たたへの歌』、『使徒公会の歌』について言及。
- 30) 塩谷栄二著「日本聖公会：聖歌集の歴史と謎（日本聖公会第9回歴史研究者の集い）」『たたへのうた』について言及。
- 31) 塩谷栄二著「聖公会：聖歌集『たたへのうた』について」『歴史研究』第8号。
- 64) 松岡安立著「古今聖歌集第5部『チャント』について」『さんび』第6号。
- 67) 宮崎光著「今・これから、私たちの賛美の歌 『日本聖公会 聖歌集』について」『日本讃美学会紀要』第3号。
- 68) 宮崎光著『聖公会の聖歌 いのちを奏でよ』。『日本聖公会 聖歌集』について言及。
- 69) 森紀旦著「現行（新）祈祷書から見る『古今聖歌集』」1～2『アンティフォン』第40～41号。

#### F) 作詞・作曲・編曲・伴奏

- 26) 猿田長春著「日本聖公会のアグリカン・チャント」『特集 礼拝における詩篇（礼拝と音楽 [季刊]）』第48号、1986 / Winter。
- 27) 沢邦介著「ここがポイント！聖歌伴奏」第106、39、23、108、348、6、27、130、137『アンティフォン』第11～19号。
- 54) 長沢滝子著「聖歌の作曲・編曲に関して」1～4『アンティフォン』第34、37～39号。
- 64) 松平惟太郎著「現行聖歌集に入れられた翻訳と作詞について」1～9『アンティフォン』第18～25、28号。

#### G) 改訂

- \* 『古今聖歌集増補版 95』（1995年）及び『古今聖歌集 [改定] 試用版』に向けて
- 6) 青木瑞恵著「礼拝 聖歌集の改訂から学ぶ（第十二期信徒神学校講座）」1～9。
  - 7) 青木瑞恵著『道はつづく』。上記『礼拝 聖歌集の改訂から学ぶ』が収録されている。
  - 17) 加藤博道著『古今聖歌集増補版 95』をめぐって」1～2『アンティフォン』第48～49号。
  - 20) 教区礼拝音楽担当者会「新しい聖歌を！キャンペーン 各教区の取組み」『アンティフォン』第51号。

- 21) 古今聖歌集増補版出版委員会「公聴会その後」1～3『アンティフォン』第39、41～42号。
- 40) 鈴木隆太著「公聴会その後」3『アンティフォン』第42号。
- 41) 鈴木隆太著「増補版、新しい聖歌を！」キャンペーン、そして…」『アンティフォン』第47号。
- 48) 千村泰子（古今聖歌集増補版出版委員長）著「古今聖歌集増補版出版委員会の働き」『アンティフォン』第43号。
- 49) 千村泰子著「増補版出版までの経過と理念」『アンティフォン』第47号。
- 57) 根谷崎武彦著「聖歌集増補版を学ぶ」『アンティフォン』第47号。
- 58) 浜屋憲夫著「今、私たちの賛美とは 各教派の賛美の現状と展望 日本聖公会」『特集新しい時代の賛美歌（礼拝と音楽 [季刊]）』第83号、1994 / Autumn。
- 60) 古本純一郎著「聖歌集改訂委員会報告」『アンティフォン』第51号。『日本聖公会 聖歌集』（2006年）に向けて
- 43) 鈴木隆太著「聖公会の改訂聖歌集」横坂康彦編『音楽（講座 日本のキリスト教芸術 1）』。
- 45) 聖歌集改訂委員会編『聖歌集改訂ニュース』創刊号～第11号（聖歌集改訂委員会 1999年1月～2005年12月）。
- 67) 宮崎光著「今・これから、私たちの賛美の歌 『日本聖公会 聖歌集』について」『日本讃美歌学会紀要』第3号。
- 68) 宮崎光著『聖公会の聖歌 いのちを奏でよ』。『日本聖公会 聖歌集』成立について言及。

#### H) 礼拝との関連

- 1) 相沢牧人著「主日の聖歌」1～12『アンティフォン』第28～32、34～40。主日礼拝で使用する聖歌選曲の手引き。
- 2) 相沢牧人著「古今聖歌集を使いこなす」1～3『アンティフォン』第44～46号。副題は「主日選曲についての一つの方法」。
- 9) 稲垣陽一郎著『祈祷書と古今聖歌集の宗教』。『古今聖歌集』（大正11年）をとおして、礼拝との関連を述べている。
- 15) 加藤啓子著「聖公会の礼拝における詩編 歌われてきた詩編、これから歌っていく詩編」『特集詩編をうたう（礼拝と音楽 [季刊]）』第124号、2005/Winter。
- 68) 宮崎光著『聖公会の聖歌 いのちを奏でよ』。第4章は「『祈祷書』に基づく礼拝音楽」。

#### I) 研修会・研究会との関連

- 6) 青木瑞恵著『礼拝 聖歌集の改訂から学ぶ（第十二期信徒神学校講座）』1～9。
- 7) 青木瑞恵著『道はつづく』。上記『礼拝 聖歌集の改訂から学ぶ』が収録されている。
- 33) 塩谷米二著「聖公会の礼拝音楽と聖歌をめぐる（北関東教区聖職養成神学塾 夏の特別公開講座）」。

#### J) エッセイ・感想

- 7) 青木瑞恵著『道はつづく』。

62) 堀越善晴著「古今聖歌集 第45番に寄せて」『アンティフォン』第53号。

#### K) 書評

46) 高木(上田)亜樹子著『『聖歌の友』から』『アンティフォン』第11号。佐藤裕著『聖歌の友』をもとにした小論。

#### L) 定期刊行物

45) 聖歌集改訂委員会編『聖歌集改訂ニュース』創刊号～第11号(聖歌集改訂委員会 1999年1月～2005年12月)。

74) 横浜教区礼拝音楽委員会編『アンティフォン』第1～53号(横浜教区礼拝音楽委員会 1982年4月～1998年11月)。

#### M) 聖歌論

9) 稲垣陽一郎著『祈祷書と古今聖歌集の宗教』。『古今聖歌集』(大正11年)をとおして、聖歌論を展開している。

19) Carles, 「Music for Japanese Hymns」『Chrysanthemum』Vol.2, No.10 (1882年10月) [「カールス著、手代木俊一訳『日本語讃美歌のための音楽』(翻訳)『讃美歌・聖歌と日本の近代』」]。

68) 宮崎光著『聖公会の聖歌 いのちを奏でよ』。第3章は「『聖歌集』収録聖歌の神学的解釈」。

69) 森紀旦著「現行(新) 祈祷書から見る『古今聖歌集』」1～2『アンティフォン』第40～41号。

聖歌論の中でカールスの「日本語讃美歌のための音楽」は、聖公会系の聖歌論として最初の論考というばかりでなく、日本[語]における最初の聖歌・讃美歌論である。ここでカールスは日本語の聖歌・讃美歌にふさわしい音楽として、1、イギリスか、アメリカの曲そのもの、2、日本の詩形に合った曲、3、可能な限り両者の中間、の3件をあげ、それぞれ曲と日本語をどう適合させるかを展開している。

カールスはペンネームと考えられ、この "Music for Japanese hymns" および The Japan Weekly Mailの投稿欄 "To the editor the Japan Mail" への投稿文<sup>2)</sup> "Music in Japan" をはじめとする数々の投稿の文体・内容から1884年頃に東京に在住していたイギリス人で、欧米ばかりでなく日本の文化に精通。音楽学者か、音楽の分析がかなりできる人物で、論題の立て方から聖職者かその職に近い人物であることも否定できない。しかし、当時のディレクトリー等からは今のところ人物を特定できてはいない。論考の中で『Hymns Ancient and Modern』を例にあげることなどから聖公会の聖職者か聖公会信徒と考えられる。

この論文が発表された明治15[1882]年は、組合教会がすべての歌詞に楽譜を掲載した本格的讃美歌集『讃美歌并楽譜』を刊行、一致教会(改革派・長老派)も『讃美歌 全』(楽譜附の版も予定していた)を刊行し、讃美歌集のレベルが一気にアップした年だった。このような時代背景の中で日本における最初の讃美歌論が生まれたことは意義深いと考える。あまり長文ではないので、ここに全文訳<sup>3)</sup>を転載し、「日本聖公会聖歌研究書誌及び解題、聖歌論」の結びとしたい。

## 日本語讃美歌のための音楽

カールス

明治15 [1882] 年

現在、この問題に対し、信頼にたる回答が得られるべきであるという、共通の願いが存在しているようである。そして、筆者がここに論説を書くことによって、その回答が得られるのではないかという期待も存在している。すなわち、もしこれ以上この件に対して意見が殆どないのならば、日本語讃美歌のための音楽に関する問題と、同じ問題としては部分的ではあるが、創作であれ、翻訳であれ、讃美歌の韻律・詩形の問題に決着をつける時が到来したように思われるのである。

日本の讃美歌は、単に一次的な間に合わせの、または直訳の段階を既に越えてしまっている。われわれの希望は、古い愛唱讃美歌がイギリスやアメリカがそうであったように、現在使用している讃美歌の何曲かが日本で歌い継がれて行くことである。受け継がれていくには詩の趣や音楽によるところが大きいが、同様に日本語に関する学識の問題も大きいということが指摘されよう。そして、これらのことは、まず音楽を分析できる耳を持った者によって解決されるべきことなのである。

讃美歌の曲に関するわたしがこれまでに聞いた回答とは、格言「人の数と同数の意見がある」<sup>4)</sup> という域をでないものであった。ここで人とは、無垢な男性・女性・子供、すなわち人類そのものを示している。しかし、曲に関する回答は二つの極端なものに単純化され、そして第三の立場も考えられよう。それは、(1) イギリスかアメリカの曲そのもの、(2) 日本の詩形に合った曲、(3) 可能な限り両者の中間、である。

(1) について考えると、日本の詩形（ミーター）に適合する西洋の曲はもともとない、ということが言える。そこで、まず、日本人は西洋の音楽を修得しなければならない。イギリスの曲は、讃美歌には合っているので、未開（？）の日本の曲に歌詞を合わせるより、何が讃美歌の曲として適しているのかを教えるほうが、より重要である。

しかしながら、わたしにとって、たとえ上記のことが的を射た答えだとしても、身勝手な答えであるように思われる。疑いもなく、外国（欧米）の音楽はわたしたちにとっては自然なものとして受けとめられている。しかし、西洋音楽はキリスト教の欠くことのできない要素というわけではない。西洋音楽自身が理想的だというわけではないので、われわれよりも、むしろ日本人にとってやりやすいことを考慮すべきである。日本の会衆にとって、まったく耳新しい異国の旋律よりも、日本の独自のスタイルにそったものを採用する方がはるかにやさしいのは明白な事実であるからである。

翻訳歌詞をそのオリジナルな曲に適合させようとしている人がいるが、その必要性がわたしには判らない。歌詞と曲がたまたま合うことがあるが、もし合わなかったら、翻訳を台無しにするより、別の曲を採用するほうがよいことは確かである。

疑いもなく、キリスト教主義女学校では欧米の、あるいは日本の伝統音楽ではない音楽を教えることができる。しかし、すべての教派が女学校や合唱の先頭にたつ女声コワイアーを持っているわけではな



い。われわれが求めるものは、将来すべての会衆が（老若男女を問わず）－例えば、野外説教の最後に歌う頌栄やわれわれ正規の教会員以外の人々がともに歌うことのできる簡単な讃美歌を－歌うことができるようになることである。この場合の曲は、いきいきとしており、常に欧米人にやかましくいわれる必要のまったくないものに違いない。ダーウィン氏が言うように、適者生存の一例なのである。そして、問題は何が適者なのかということである。

(2) に対する回答は、もっぱら日本の詩形である七五調、そして三十一文字によるものである。そして、日本人にとって一般的な歌い方である声を震わして歌う歌い方では西洋の讃美歌を歌うことは望めないといわたしは考えている。しかし、讃美歌を七五調で創作する、また翻訳することはできる。6 シラブルのうち5 番目のシラブルが、長音符、またはタイでつながれた音符を含み、六・五のミーター（詩形）の英語讃美歌が幸運にも多く存在する。タイでつながれた音符のタイをとることで、または長音符を二分割することで、ミーター（詩形）が六・五の讃美歌はすぐに七五調にすることができる。そしてこの工夫はかなりの成功をおさめ、用いられているのである。

故国の友人は、日本の様々な韻律・詩形に合う曲を書いている。しかし、これらの曲は、聞いてみると凝りすぎている。現在ともかく望まれている曲は、まったく臨時記号のない、そして難しい4 シラブル、7 シラブルをすべて排除した、可能なかぎりシンプルな曲である。わたしは、曲のどこで臨時記号が使われるのかを注意深く耳で聞き、検討してみた。その結果、われわれ欧米人がごく自然に歌える箇所でも、日本人にとっては歌うことが殆ど困難で、そのことが常に起こる箇所があるということが判った。例えば、よく知られた讃美歌で、7 シラブルが4 回（4 行）続く、ガントレット博士作曲《University College》の2 行目には、ナチュラルがあり、一時的に属調のハ長調に転調する。この小節の音符はシ（B）のフラットだが、ナチュラルのため高音のシ（B）の音で歌い始めなければならない。しかし、日本の会衆（女学校のコワイアーを除く）は、シ（B）のフラットで歌い、どんなことがあっても、はっきりとしたシ（B）の音では歌っていないことに、わたしは気付いたのである。

Hymns Ancient and Modernに収録された讃美歌で、今まで述べた理由により、たやすく七五調に変えることができる讃美歌がある。例えば、第91番333番、第390番、第391番、第392番である。また、第74番は七・五のミーターである。そして、第22番、第163番、第210番は、七・七・七・五のミーターのため、日本のミーターとしてリストに加えても良いかも知れない。ここにまず歌い始めることのできる上記15曲のリストがある。これに、Church HymnsとHymnal Companionを加えれば、日本の讃美歌に適した讃美歌をかなりの数見いだすことができるであろう。これらの讃美歌は素晴らしい曲ばかりであるが、日本人が歌うには、難しかったり、他の理由から適切とは考えられないものもあり、約半分はこれらの讃美歌のうち除かれる必要がある。上記3種の讃美歌集は、イギリス国教会で通常使用されている三つの讃美歌集である。

(3) の回答に関して言うならば、すなわち、日本の音楽とわれわれ西洋音楽のどちらかを使う、というように限定するのをさけるためには、われわれ自身が適用範囲の限定をまったくしないためには、西洋音楽が主に弱強格（CM、LM、SM、七・六、etc.,）である一方、日本のものは主に強弱格であるということにまず留意すべきである。日本語は最初のシラブルにアクセント（強勢）があるように思われる。それ故日本人はわれわれ欧米の強弱格（七・七、八・七、六・五）の曲をかなり上手に取り入れている一方、弱強格の曲を歌い始めようとする場合戸惑っているように思える。もしそれが、LM（ロ

ング・ミーター）ならは最初の音符にアクセントのある《Sun of My Soul》のような曲を薦めたい。この場合、語順を理論的になるように変えることは勿論のことである。イギリス国教会讃美歌集の讃美歌のうち二篇の讃美歌は教義問答を教える教師によって創作されたものである。一つは、七・七・七・七で、もう一つは七・五・七・五・七・五である。

さて、われわれは、イギリスの古い（中世）音楽に立ち帰ってはどうかであろうか。イギリスの古い音楽には、殆ど4シラブル、7シラブルが存在しない。日本の伝統音楽にみられるようなルーラード（旋転）が頻繁に見られる。（例えば、《Good king Wenceslas》や Helmore's Christmas Carols に収録の曲）。この時代の音楽は近代の音楽よりはるかに優れていると一般的に考えられているのに残念である。ポール博士は次のように述べている。「パレストリーナやその時代の作曲者の音楽を模倣すべきであると、わたしは考えている。」

詠唱に関しても、われわれの多くはおそらくアングリカン・チャントを歌っている。ここで再び中世の音楽（グレゴリアン・チャント）の問題が登場する。中世の音楽は日本音楽の様式に似ているような気がするのである。わたしは、アングリカン・チャントの方を絶対的に支持し、グレゴリアン・チャントをまったく受け付けないが、その立場から離れて以下論述する。グレゴリアン・チャントの楽譜には、記号というものがまったくない。そして、しばしば近代の音楽では見られない長二度で終わる。わたしが楽譜を持っている三味線音楽も長2度で終わる。それは、ピアノの黒鍵だけで演奏される類の音楽（5音階）である。

この雑誌 The Chrysanthemumの読者のなかで何人かは、僅かであっても日本の曲を収集することができたのだろうか？ おそらく、多くの人は日本の音楽に対し、それを取り巻く環境から悪い連想を持っている。しかし、好まれている英語の曲でも同様なことがいえる。例えば、《Helmsby》や、古い曲《Lo, He comes with Cloudes Descending》は、フランスの道德的とはとてもいえない歌である。また、《Sun of My Soul》の曲としていつも歌われている曲が、実はイタリアの酒場の歌であることが最近判った。イギリスでは、一般に「悪魔はよい曲のすべてを所有している。」と言われてきた。われわれは、ここ日本で悪魔の所有ではない、よい曲を何曲か手中にすることができないのであろうか？ または、少しでも悪魔からよい曲を盗み取ることはできないのであろうか？

## 注

1) 年代順は、「論文名」著者、『書名、雑誌名』巻号（出版者 出版月）〔備考〕の順。東京以外は出版地をいれた場合がある。また『雑誌名』だけで著者をあらわなかった場合、『雑誌名』巻号、編者（出版月）とした。人名順（五十音順）は、著者「論文名」『書名、雑誌名』巻号（出版者 出版年）〔備考〕の順。東京以外は出版地をいれた場合がある。

聖歌集改訂委員会編『聖歌集改訂ニュース』創刊号～第11号（1999年1月～2005年12月）は、聖歌集改訂を目的とした小論文、記事の集合なので個々の著者を表記せず、編集委員のみを表記した。委員長 主教・古本純一郎〔神戸教区〕、書記 鈴木隆太〔横浜教区〕、広報 司祭・竹内謙太郎〔東京教区〕、司祭・松岡度一〔大阪教区〕、主教・森紀旦〔中部教区〕、司祭・松本正俊〔京都教区〕、青木瑞恵〔横浜教区〕、加藤啓子〔東京教区〕。

『アンティフォン』創刊号～第53号（横浜教区礼拝音楽委員会 1982年4月～1998年11月）は、日本の聖公会音楽に関する論文、記事だけを抽出、教会音楽全般にわたる論文、記事は収録しなかった。

また、日本の聖公会音楽に関する論文、記事、日本の聖公会音楽に関する論文、記事であっても、簡単なコラム、報告、雑感、投稿等は収録しなかった。

筆者は『立教学院史研究』第3号（立教大学立教学院史資料センター 2005年3月）で「日本聖公会聖歌目録」（以下、「目録」）を作成し、日本で明治初期から2004年12月末まで刊行された聖公会聖歌集を目録化した。当初この「目録」とタイアップするかたちでこの期間の日本聖公会聖歌に対する研究の「書誌」を作成する予定であったが、2006年11月に『日本聖公会 聖歌集』が出版され、前回の「目録」での最新の主な聖歌集は2002年9月刊行の『古今聖歌集〔改正〕 試用版 別冊《礼拝式文、朝夕の礼拝》』なので、「書誌」と「目録」では多少のタイムラグ生じてしまった。また所蔵先不明の1874（明治7）年『たゝえのうた』は刊行の有無が疑問視されているが、この聖歌集に触れていると考えられる文献が存在するのでこれも収録した。

- 2) To the editor the "Japan Mail", The Japan Weekly Mail, Oct. 25, 1884.

Music in Japan; to the editor the "Japan Mail", The Japan Weekly Mail, Nov. 1, 1884.

The Japan weekly Mailのコレスポンダンス（通信）欄に、1884年9月20日から1月15日まで7週間Relegion and Yamato-DamashiiというタイトルでペンネームA TOKIYO PROFESSOR, MUSICIAN, C.S.E., A.B.C., SCIENCE, 及びC. G. KNOTTによって繰り返された論争に加わっている。上記資料の存在は洋楽史研究者故中村理平氏にご教示いただいた。

- 3) カールス著、手代木俊一訳「日本語讃美歌のための音楽（翻訳）」『フェリス女学院大学音楽学部紀要』第3号（1998年3月）、『讃美歌・聖歌と日本の近代』（音楽之友社 1999年11月）、261～265頁。  
4) 古代ローマの喜劇作家テレンティウス（紀元前195頃－159）の芝居『ボルミオ』の中に出てくる言葉 "Quot homines, tot sententiae"

「日本聖公会聖歌研究書誌及び解題、聖歌論」を執筆するにあたって以下の方々に資料・情報の提供をしていただいた。この場をお借りして謝意を表したい。相沢牧人氏、青木瑞恵氏、諫山禎一郎氏、大江満氏、塩谷栄二氏、鈴木隆太氏、松岡興二氏、山中一弘氏。